
特別Aクラスー

空井美保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特別Aクラスー

【Nコード】

N7843X

【作者名】

空井美保

【あらすじ】

不良生徒などが多く集まる和歌倉中学校。

その中でも、一番不良生徒が多いクラス

3年A組。

人気のないクラスで

しかもクラス替えも1年の時からない状態。

転校生もA組を選ぶことなど絶対にないはずだったが

そのクラスに2人の転校生がやってきた。

その名前は 知念侑李と有岡大貴。

彼らはケンカ上等。そして頭が良い。
彼らがやってきた目的とは？
これから生徒の未来が変わってゆく。

和歌倉中学校に謎の転校生（前書き）

このお話はジャニーズ事務所および

NEWS、関ジャニ[∞]、KAT-TUN、Hey! Say! JUMP、Kiss-My-F[∞]t2、SEXY ZONEの

グループメンバーの名前が使われています。

性格、言葉遣いは 実在するメンバーとは違う部分がたくさんありますが

このお話はフィクションです。

和歌倉中学校に謎の転校生

彼らがこの中学校にやってきたのは、理由がある。

それは、乱れたクラスを直すため、しっかりとしたクラスにさせるため。

ケンカをして補導された人、不登校な人たちが集まるクラス、3年Aクラス。

僕は知念侑李、そして親友の有岡大貴。

有岡と出会ったのは小学5年生の時。

弱弱しくて、人見知りだった僕と仲良くしてくれたのは有岡ただ一人。

そして6年、中1、中2とクラスは運よく一緒だった。

見た目によらず、ケンカは上等。

有岡は弱いけど、2人で支えながら、目的を果たすことを決意した。

校舎前

知念「よし！行くか」

有岡「●真剣な表情●」

そしてクラスに入り・・・

先生「今日から一緒に学校生活を送ることになった、知念くんと有岡くんです。」

有岡&知念よろしくおねがいします。」

先生「左の一番端っこの2つの机、並べておいたから、右に知念、左到有岡、分かったか？」

有岡「はい！」

高木「●にらむけど、知念と有岡は気付いていない●。」

田中「●立ち上がり、廊下に出て、歩いて行く●」

勉強は終わり、中休み。

しっかりした人ももちろんクラスにいる。

そのしっかりした人たちを話していた。

有岡「えっ??なんでここに転校してきた??」

八乙女「だってさぁ・・・ねぇ?」

手越「ここ、評判悪い学校だし。」

有岡「そんなの、関係ないじゃん。」

北山「それに、3年Aクラスに希望してまで入ったって事はなんか目的でもあるの?」

有岡「なっないよ?それに有岡って苗字だからAの方がいいかな?ってさ」

全員「それだけ??」●笑いが溢れる●」

有岡「そういえば・・・知念どこだ??」

北山「さっき、屋上のところで見かけたけど、行ってみたら?」

有岡「ありがとう。」

そして屋上に向かうと・・・

知念「●じつと景色を眺める●」

有岡「ココ綺麗だね、こういう景色ってさ気持ちいいくなるんだ。リラックスできるしね」

知念「そういうことじゃない。眺めているわけじゃない、考えてるんだ。」

有岡「考えてるって?」

知念「有岡は全然分かってないね。僕たちがここに来たのは、生徒を元のように戻すためだよ?」

有岡「そうだけど・・・」

知念「僕ってさ、見かけはニコニコしてるキャラだけど、心の中ではちゃんと目的に沿ってるから」

有岡「へえ・・・。でも、まずはクラスに行こう??みんな待ってるよ?」

知念「そうだね・・・」

最近の知念はなんか変だ。

ニコニコの笑顔にも裏がある。

前の知念は、裏表のない、いつも笑顔だったのに今は知念というオーラが消えた。

教室で・・・

知念「そのばらばらの席の人たちってさ、どういう人?」

藪「えっと、ケンカしたり、不良生徒って感じかな?」

知念「いつから?」

藪「高校1年の時からずっとだよ?だから、このクラスのクラス替えは一度もないんだ。」

八乙女「まあ、クラス替えしたとしたら、先生にも、他のクラスにも迷惑になるみたいだからね」

有岡「高木・・・田中・・・加藤・・・中島・・・?」

八乙女「ああ、このクラスには中島が2人いるんだ。裕翔と健人。」

有岡「そういえばさ・・・。右の窓寄りの席って使ってないの?」

藪「そこは山田の席だよ?不登校、ケンカ、補導の連発しているクラスーの問題生だよ!」

知念「クラスーの問題生・・・か・・・」

そこで知念の表情はグッと変わった。

何かに気付いたような、そんな気がした。

ただ知念は行動に移すことはしなかった。
なぜだろう・・・

不良チームの集まり

高木「あの転校生、どう思う。」

田中「一言で表すとうざい。」

中丸「一言って、それ以外なんだよ。」

加藤「正直弱そうだから、別に倒すほどのやつじゃなくなっ?。」

中島「じゃあ、そのまんまにしく気っすか?。」

菊地「弱いやつは、倒すの、面白そうじゃないっすか?。」

高木「だめだ。山田がいる。あいつがいる時点で、やる気でねえし。」

そうやってからかうように笑う不良チームたち。
それを影から見ていた知念。

知念「あのグループが一番手ごたえある気がする。」

有岡「えっ??? 山田は???」

知念「山田は簡単だよ。あの手を使えばね」

有岡「あの手ってなに???」

知念「それはそのときに教えるよ。」

そのころ山田はどこかというと

学校に来ていた。

学校に来て、校舎の倉庫の中で寝ていたのだ。

それに気付いた有岡は真っ先に知念の元へ。

有岡「ねえねえ！！その倉庫で山田が・・・」

知念「今日は山田の日ではないから。別に勝手にしょ。」

知念はいつたい何者なのだろう。

目的がないと、関わらない。

普通、クラスを元のクラスにしたいのなら

乱れている生徒を優先に直していくのが普通ではないのか？

知念「今回は中島と菊地だ。」

有岡「中島健人と菊地風磨・・・か。」

知念「あの人たちは、決して頭はよくない。つまり、頭を使った問題なら、僕たちでも勝てる。」

有岡「でも・・・勉強に勝つても、よくなるの？」

知念「中島は家の問題で、離婚になるかならないかの境目。」

知念「そして菊地はお父さんとお母さんは別れていないけど別居中。そして母親と暮らしている。」

有岡「その情報どこで・・・」

知念「えっ？そのくらい知らないと、このクラスは終わっちゃうよ？」

有岡「・・・。なんか必要なものある？？用意できるものなら用意できるけど。」

知念「必要なものは何もないよ？」

今回のターゲットは中島健人と菊地風磨の2人。

2人は不良チームの下っ端的存在で

1年生までは普通のまじめな中学生だった。

だけど、転校してきた高木雄也にさそわれて

不良チームの入った。

どちらとも、家庭の事情がある。

中島健人は親の離婚の境目で生活。

菊地風磨は親の離婚ではないが、別居しているためほとんど1人。

知念「中島健人、菊地風磨。」

中島「なんだ。転校生。」

菊地「俺たちを呼び出すとは生意気なやつらだ。」

有岡「●びびっている●」

知念「今日はお前たちを倒しに来た。」

中島「つは??」

菊地「意味わかんねえし。倒すって・・・お前たちが??」

有岡「知念・・・」

中島「そこのお前、どうやらびびってんな?」

有岡「・・・・・・・・びびってないよ・・。」

菊地「まじかよ??目をそらすってびびってるとしかいえないんですけどー」

知念「●キックする●」

ついに知念は攻撃開始!!

まずは相手をキックして

相手のやる気を伺う。

中島「やる気か?」

知念「ああ。僕、負ける気なんてないから。」

知念は本気になった。

とてもきびきびした動きでキックや殴つたりを繰り返し

相手が少しぐったりしてきた時

知念「君たちの親は決して幸せではない。」

中島「・・・・・・・・・・・・・・・・」

知念「離婚、別所」

菊地「・・・・・・・・・・・・・・・・」

知念「それと、君たちがいるからだ。」

知念「有岡。」

有岡「そんな不良ぶってたら、いつになっても親からは愛されない
ってことだよ。」

知念「親不孝者って言葉があるけど、君たちにピッタリだよね。」

有岡「もう高校3年生だし、卒業できなかつたら、嫌われちゃうね
？」

中島「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この日。

少し暴力を振るってしまったが
血を出すほどではない。

その暴力を振るったあと

知念、有岡は言葉で説得した。

そして彼たちは消えていった。

次の日

高木「今日、あそこのゲーセン行こうぜ！」

田中「賛成!!」

加藤「OK!OK!」

中丸「ゲーセンだったら得意!!」

玉森「よし！金どうする？」

高木「かつあげするに決まってる？」

高木「中島、菊地、かつあげしてこいよ。」

中島「俺たちさ・・・」

菊地「今日でこのチームから外れるから・・・」

田中「っは？」

中島「俺たちの親は別居してたり、離婚してたり、幸せって思うような環境にいないんだ。」

菊地「だから、こんなことしたら、もっと悲しませるだけだと思うから。」

といって中島と菊地は走って学校へ向かった。

中島と菊地は、案外親思いなのだ。

こうして知念、有岡の2人は

問題を元の彼らに替えていくのである。

時々失敗する時もあるけど

支えあつたことを彼らは忘れていない。

これから新たな生徒が元に戻っていくのであろう。

D組の不登校生（前書き）

このお話に出てくる女子の名前は実在しないお名前です。

男装ガールなどのお話と同じく、わたくしが作った名前です。
どうぞ楽しんでください。

D組の不登校生

有岡「なんか机に手紙が入ってる……」
北山「あつ本当だ！！開けてみれば？」

有岡は元から明るい性格の為
クラスにいち早くなじめた様子。
転校してきて2日目の朝
机の中に1通の手紙が入っていた。

「有岡くんへ」

初めまして3年D組の雛形桃です。
昨日転校してきた時、今までにない
ドキドキでした。
可愛い笑顔といつも元気なところが
ステキだなと思いました。
よかったら今日の休み時間に
学校の校舎前の倉庫に来てください。
舞ってます。　―桃―

有岡「雛形……桃？」
八乙女「あ！！その子……」
有岡「どうしたの??」
藪「ああ、八乙女は桃ちゃんに片想いしてたんだよ。3年の中では
一番可愛いらしいよ？」

知念「●無言で教科書を机にいれる●」

手越「桃ちゃんってね、お金持ちで礼儀正しくて可愛いからなかなか告白してくれないんだ。」

有岡「そうなの？」

北山「元々、恋愛には興味ないって言われて誰かさんが振られて気が・・・●亀梨をみる●」

中島裕「亀梨はOKされたけど、他の女子からモテていたため、危ないって噂出たよな？」

亀梨「桃と真剣に付き合うつて言ったのに、他の女子が変なこと言うから・・・」

有岡「知念・・・どう思う？OKするかNOにするか」

知念「別にどっちでもいいんじゃない？好きならOKすればいいじゃん。」

裏表は恐ろしいことだ。

みんなの前ではニコニコしている知念はとても怖い。

そこに中島健人と菊地風磨がやってきた。

有岡「・・・・・・」

知念「・・・・・・」

他全員「●びびる●」

中島健「これからは勉強に集中するから、別にびびんなくてもいいから。」

菊地「それから、高木たちのグループからも抜けたから。じゃあ」

有岡「勉強がんばれよ？」

八乙女たちはなぜこういうことになったのかは知らない。
このことはあまり広まってはいけないから教えられない。

山田「●ドアを乱暴に開けて教室に入ってくる●」

八乙女「そっそうだ。有岡・桃ちゃんの顔見に行く？」

有岡「いついやく・いいかな？？僕はみんなのアイドル的存在の方がいいから！！」

山田「●有岡をにらむ●」

有岡「・・・・・・・・・・・・・・・・」

知念「●山田がにらんだのを見る●」

山田は成績はクラスの中では中。

悪くもないしよくもないと言ったところ。

山田は中学2年生のときに転校してきて

クラスになじめず、1人行動が多かった。

家には1人しかない時間が多いため

親からの愛情がない。

そのため反抗期を迎えても、そのストレスを発散する人が
いなかったためケンカなどを繰り返しては補導されていたらしい。

中島裕「そういえば、朝、山田とすれ違ったんだけどさ・・」

八乙女「おどされたとか・・・？」

中島裕「ちがうちがう！！後ろを女子がつけてたんだよ。」

薮「好きだからってこと??」

中島裕「うん・・・。その子の名前が確か佐藤美莉愛って子だよな・
」

北山「佐藤美莉愛さとうみりあって最近転校してきた子じゃん。」

手越「まあ、山田も一時期はモテたからね」

佐藤美莉亜。

和歌倉中学校3年C組の女子。

2年生の冬に転校してきた子で

女子の中では静かな子。

人気のある明るい女子とあまり一緒にいることがなく

人見知りな子である。

中島健「そういえば、佐藤美莉愛ってやつ、病気だって聞いたけど。」

手越「何の病気??」

中島健「確か・・・心因性失声症ってやつで声が出ないらしいけど。」

菊地「最近になった病気らしい。」

有岡「情報サンキュー!! ねえねえ、中島も菊地も俺たちのグループに入れば?」

中島健「・・・いいの?」

有岡「うん! そもそも、クラス一緒なのに別々なんておかしい!」

菊地「じゃあ・・・よろしく。」

授業が始まり・・・

先生「あれ? 今日山田は来てるけど、高木たちが来てないなあ。」

そのまま授業は進み

休み時間。

有岡「君が雛形桃ちゃん・・・?」

桃「はっはい!!」

有岡「僕のことどこで知ったの？」

桃「廊下を知念さんと2人で歩いていたのを見かけたのでつい見とれてしまったんです。」

有岡「そうなんだ」

桃「あの・・・有岡くんもわたし好きなんですけど・・・一つお願いが・・・」

有岡「何？」

桃「・・・伊野尾慧くんを探して欲しいんです。わたしのクラスの男子なんですけど・・・」

桃「最近不登校になっちゃって。頭もよくてまじめで、何でもできる人なんです。」

有岡「伊野尾くんのことが桃ちゃんは好きなんだね？」

桃「・・・」

有岡「分かった。僕はみんなのアイドル的存在でいたいから別に気にしてないよ●頭なでなで●」

桃「その伊野尾くんは明後日にA組に移動なんです。」

知念「不登校状態が5日間以上続くと問題生と判断されA組に移動ってこと？」

桃「問題生ではないんです。だからなぜ不登校になったのかを知りたくて」

伊野尾慧。

3年D組の男子。

頭もよく運動神経も良い。

最近はずっと学校に通ってなく
電話をかけても通じないとか。

放課後

知念「有岡ってモテるんだね。初めて知った。」

有岡「初めてって……」

知念「まあその話はおいとして」

有岡「伊野尾の家の住所は先生から教えてもらった。地図ではこの家なんだけど……」

玄関には伊野尾と書いた表札が。

知念と有岡たちはインターホンを押し

誰かが出てくるのを待った。

そうすると

伊野尾「………？君たち誰？？」

有岡「僕たちは、和歌倉中学校の3年A組の有岡と知念。」

知念「2日前に転校してきたんだ。」

伊野尾「僕がA組に移ることはもう知ってるけど、他に用事でも？」

有岡「どうして来ないの？学校に。」

有岡たちは学校に来ない理由を聞いた。

そうすると

伊野尾「え？」

知念「学校には理由もなく休んでるってD組の先生から聞いたんだ。」

伊野尾「クラスにその理由言ったら、変に気を使われるから嫌なんだ。」

伊野尾「元々体弱くて……。最近なんか思っように体が動かなくなってきた。」

伊野尾は病気を患っていた。
体が思うように動かない。
症状はそれしかないよう。

伊野尾「病気ってこと言ったら氣を使われるかもしれないだろ？それが僕は嫌なんだ。」

有岡「だけど、伊野尾を待ってる子だっているんだよ？」

知念「雛形桃ちゃん。彼女はどういう人？」

伊野尾「お金持ちで、勉強も出来て、クラスに人気者みたいな感じ・」

有岡「桃ちゃんね、伊野尾のことが好きなんだって。」

伊野尾「ごめん、今日はもう帰ってくれる？塾に行くんだ、明日は学校にも行くから。」

そういつて家の中に入っていつてしまった。
帰りに2人は桃の家に訪れた。

桃「伊野尾くん、明日から学校来るんですか？」

有岡「うん、よかったね！これで思い伝えられるじゃん。」

桃「こんなわたしでOKしてくれるでしょうか。」

有岡「大丈夫だよ！！勇気出さないと、上手くいかないよ？」

桃「はい！！勇気出します！有岡くんも知念くんもありがとつございしました。」

有岡「じゃあ、明日ね！！」

次の日

朝の自由時間、D組を見に行くと
伊野尾と桃の姿が

10分後伊野尾を呼び出してみると

知念「付き合うことは出来ない？」

伊野尾「A組に行ったらなかなか会うこともできないだろうし、それに休むことも多いから」

有岡「じゃあさ、今度どっかに連れて行ったら？美男美女カップルに見えるよ??？」

伊野尾「そうかな．．．じゃあ、デート気分でどっかに行こうかな」

次の日は休みの日

知念と有岡は伊野尾と桃の後を尾行していた。そうすると2人は遊園地に向かっていた。

桃ちゃんには病気のことは言わないでといわれた2人。

そのため、変に声もかけられない状態だった。

桃「ねえ、伊野尾くんはA組に行ったら人気者になれるかもしれないね！」

伊野尾「そうかな？あまり人気者とかそういうのはな．．」

桃「もうちょつと勇気出していかないと！そうすれば、きっと夢も叶うって！」

伊乃尾「そうかな．．．．．」

桃「あの．．．．．」

伊野尾「どうしたの？」

桃「わたし、伊野尾くんのこと好き！優しくてカッコよくて頭がよくて．．．」

伊野尾「桃ちゃん．．その気持ちは受け取っておくけどきつと付き合っつて程まで行かないと思う。」

伊野尾「でも、友達以上恋人未満までならOKだけど・・・」

桃「・・・本当？友達以上でもいいの？」

伊野尾「うん！」

桃「ありがとう。」

次の日伊野尾はA組に移動してきた。

この日は山田と高木グループは来なかったが
その他全員、伊野尾を受け入れた。

そのころ高木たちは

高木「なあ、あの転校生の目的知ってるか？」

中丸「知らないけど。」

高木「あいつら、俺たちとか山田とか普通の生徒に戻していくらしいぜ」

加藤「本当かよ、あいつらに何ができるんだっつーの」

彼らも徐々に転校の意味を知ってきた。

今度は誰がターゲットか。

D組の不登校生（後書き）

こちらの小説をご覧の皆さん、初めまして空井美保です。

わたしの書いた小説を何度かご覧の皆さんは知っていると思いますがわたしの小説は、文章もあります、会話が多い小説です。

わたしが小説を書くときは、いつもドラマを自分の頭の中で想像して書いております。

文章が多い小説好きの方には合わない小説かもしれませんが引き続き、これからもよろしく願います。

絆を深めればきっと変われる！みんなで説得 前編

伊野尾「そういえば、桃ちゃんがね、勉強に専念するって言ったんだ。」

有岡「ってことは？」

伊野尾「もうお互い忘れることにしたっていうか・・・お互い勉強に専念するっていうか」

知念「伊野尾はそれでいいんだね？」

伊野尾「うん。」

有岡「そういえばさー!!」

と世間話をしていると

廊下では・・・

高木「俺たちを変えるってさ一万年かかって出来ねえよ。」

田中「でも、そろそろ勉強しねえとな」

中丸「俺も、母ちゃんに何言われるか分かんないし」

加藤「早くこの学校を卒業するために勉強がんばるぞー！！！」

中丸＆田中「おーーーーー！！！」

高木「話聞いてねえし。」

玉森「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ずっと黙っている玉森。

それに気付いた高木は

高木「どうした玉森。お前も勉強か？」

玉森「別に勉強はいいや。」

高木「そう来なくっちゃ。」

玉森「でも、俺たち変わらないと、このままだったら迷惑かけてばかりで思いでも何もないよ。」

玉森「まあ、それといって何も出来ないけど、でもやる気はあるんだよね」

高木「俺たちには変わるっていう言葉はない。」

玉森「だったら、高木一人でやってれば？」

高木「あっそ、別にお前なんてガキ一人もやっつけねえし、そんなやつはこっちからさようなら」

くだらない口げんか。

彼たちも少しはまじめになろうと考えていた。

そろそろ高校の受験も近くなる季節。

勉強もそこそこはやっていけないと

志望校は絶対に無理だろう。

藪「え??女子を使うの??」

北山「どうやって??」

八乙女「女子を利用して、できるの?」

手越「大丈夫??」

有岡「不良って女子には弱いでしょ??」

八乙女「まあ・・・ドラマではね・・・」

知念「計画するなら、女子は可愛い方が有利じゃない?」

有岡「うん!3年生の中から片っ端探そう!!」

知念「じゃあ、休み時間にOK?」

一同「OK!」

不良が女好きってことはドラマからの情報収集。

これで本当に上手く行くのであろうか・・・。

というよりも高木たちは不良といえるのだろうか。

不良といえば喧嘩ばかりで、口悪くて

先生を常になぐって、怒られて、しかも。

弱いものはぶっ潰すが不良のイメージ。

伊野尾「2年生の女子に、愛香ちゃんっているんだけど、可愛いってD組の男子たちが・・・」

有岡「彼女いるとか噂あった？それじゃ・・・だめだけど・・・」

伊野尾「いないと思うよ？静かな子だから噂なんてないよ。」

知念「じゃあ、その子に決まりだね。よかったね有岡。」

知念はそういつて笑った。

最近の知念は本当に変わった。

優しくなったというか

影を見せなくなったというか、

イメージが変わった。

転校してきたときは

自分の目的の為にだけに動いていたけど

今は友達の為にも動いている姿がある。

有岡「・・・・・・・・・・」

知念「どうしたの??ニヤニヤして。」

有岡「知念がよかったねなんて言った所見たら照れちゃうよ。」

知念「なんで・・・」

有岡「だって、今までずっと暗かったんだもん!!」

知念「話それた、で?その愛香ちゃんにするの?」

伊野尾「高木ってね、美人のお姉ちゃんが外国に住んでるとか噂ら

しいよ」

有岡「伊野尾って情報つかむの上手いね〜」

最近はクラスになじむことを一生懸命になりすぎて生徒の問題を解決する事をやっていない。と思っていたが

しっかりと取り組んでいるようだ。

しかも仲のよくなった生徒も一緒に・・・。

彼たちの目的は知られてはいけないはずなのになぜそこまでして友達と関わるのだろっ。

と、前は思ってたけれど、それは間違っていた。友達と関わることで、絆も深まり

大人数で目的を達成するほうが彼たちも楽しいのだろう。

だけど、本当に目的は達成できるのだろうか、素直な人も、もちろんいるが、不良生徒も多い。不良生徒はそんなに簡単に倒すことは出来ない。彼たちはどうやって倒すのか。

有岡「そろそろなんだけどな〜」

ただいま放課後。

知念「来た。」

藪「遅れちゃった・・・。ごめん!!」

北山「この4人しかスケジュール合わなかったんだ。」

手越「何からはじめる??」

八乙女「まずはその子にこのこと言わないとまずいでしょ。」

有岡「そう思うと思って、愛香ちゃんには許可を頂いています!!」
知念「その計画の実行日は明後日の休み時間。」

伊野尾「明後日が過ぎたら、日替わりで見張ってないといけないんだ。」

薮「じゃあ、月曜日で。」

手越「金曜日しか無理なんだよね・・・休み時間。」

北山「水曜日なら休み時間は暇だし。いいよ?」

八乙女「どこでもOKだけど・・・みんなのこと考えて、火曜日にするね。」

有岡「じゃあ、木曜日は知念と俺の2人で。」

そのとき全員が違和感を感じた。
有岡が自分のことを俺と言った。

知念「・・・俺?」

八乙女「僕って言ってなかったっけ?」

伊野尾「本当だ!どうしちゃったの?」

有岡「なんか俺っていったほうがしっくり来る気がしてさ。強くないと!!」

知念「がんばれ。」

絆を深めればきつと変われる！みんなで説得 前編（後書き）

知念侑李というこの物語のキャラは、ピリピリしていて、人間に厳しくて

一人行動が多くて、無口なキャラにしていたつもりだったのですが知念侑李というHey! Say! JUMPでの知念は

ニコニコしていて、いつも元気で、可愛いです。なので少しキャラを考え直してみました。

JUMPと物語のキャラを足して割ったキャラというのに変わりました。

もちろん1話からこのキャラです。

今変えたわけではないので、ご安心ください。

普通の小説ですと

●●●「●●●」

とは書かないと思いますが

私の場合はカギかつこが多いので

名前を表記させていただいています。

絆を深めればきっと変われる！みんなで説得 後編

家に帰る途中。

高木と愛香が一緒に歩いているのを見かけた。

こっそり、尾行をすることに・・・

愛香「この問題はこういふとき方をしたほうがやり易いですよ。」

高木「へえ、知らなかった。」

愛香「高木さんって女の人に優しくないとみんないってたんですけど、とっても優しいです。」

高木「そうか？」

愛香「ごめんなさい。もうそろそろ塾なので、帰りますね・・・」

高木「ああ」

愛香「また今度お話聞きたいです。では」

そして知念と有岡の近くに来たところで
声をかけてみた。

知念「愛香ちゃん？」

愛香「はっ！！」

知念「高木と合ってたんだ。あっ！ごめん、少し見ちゃってた・・・」

有岡「どうして一緒だったの？」

愛香「そっそれは・・・」

訳を聞いてみると・・・

有岡「えー？好きになつてきた？？」

愛香「なんか計画を実行している間に気になつてきたというか、もつと一緒にいたいなつて・・・」

知念「うそでしょ？っていうのも失礼だけど、愛香ちゃんってタイプそんなのだっけ？」

愛香「わたし恋が出来なくて・・・母も父も恋愛は禁止だって言っ、毎日メール受信確認を」

知念「じゃあやばいじゃん。」

愛香ちゃんのお父さんは東京大学の教師。

お母さんは芸能事務所の社長さん。

教師と社長の子じゃ、恋愛禁止といわれるのもおかしくない。

愛香「だけど、高木くんはなんか優しい気がします。」

有岡「・・・・・・・・」

愛香「目が合った時も優しくコツチ見てくれたし、最近変わってきたし・・・」

愛香「高木くんのこと、もうちょっと信じてもいいんじゃないかな？って思います。では塾なので」

次の日

二人はずっと昨日のことに悩まされていた。

もうちょっとだけ信じてもという言葉が心を動かそうと必死な状態。確かに、もう少し期待するのもいいだろう。と思うが

彼らの転校してきた理由にならない。

有岡「もうちょっと信じたほうがいいか・・・」

知念「だけど今すぐ直さないと時間がないんだよ？もう3年生だからさ・・・」

有岡「Wで行かない？山田と高木、それか高木と後ろくっついてるやつら」

知念「山田は1対2で行こう。」

有岡「じゃあ、高木と後ろくっついてるやつ。OK？」

知念「うん。」

休み時間

高木のあとをつけた。

そうするとまた

愛香ちゃんと一緒に会っていた。

高木「さっきからつけてるのはお前らか、何も出来ないくせに後つけんな。」

愛香「行こう・・・高木くん」

有岡「愛香ちゃんはどっちの見方なの？」

知念「そうだよ。いきなり僕たち裏切る気？」

愛香「それは・・・」

そんな中

職員室の会議では

校長「3年D組の転校生についてだが、暴力を生徒に振るつたと。2年B組先生「はい。うちの生徒が見ていました。4人も見たのですから嘘ではないようです。」

1年E組先生「わたしのクラスの2人も見ています。3年D組の生徒をD組の生徒が殴っていたと」

校長「処分が必要ですね。この学校は中学校、しっかりと教育をしないと将来がだめになる。」

2年B組先生「処分はきついほうがいいですね。D組のけじめとして」

1年E組「この処分を聞いて他の生徒も見直せばいいんですけど。」

校長「知念侑李、有岡大貴という2人を2ヶ月処分にするが、先生方はそれでいいですか。」

一同「はい。」

3年D組先生「では彼たちに伝えておきます。」

2年と1年のクラスの生徒が知念と有岡が
中島と菊地に暴力を振るっているところを
目撃したとのもので処分が決まった。

次の日

有岡「どうする？この後・・・」

知念「俺たちは俺たちで勉強しよう。」

有岡「そういうことじゃなくて」

知念「え？」

有岡「高木たちのこと・・・」

知念「まああせることはないじゃん。下校時間から辺つろついでいれば大丈夫。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7843x/>

特別Aクラスー

2011年11月15日17時39分発行